

「神の栄光のために」

私達は過去三週、人生の「意味」と「目的」について、また私達の「動機」ということについて礼拝でみてまいりました。これらの意味と目的、また動機は私達の人生を築き上げていくために不可欠なものであり、私達がこれらの事に対して主にあって明確なものを見出すのなら、私達の人生は変わると信じます。

今日はその具体的な人生の意味と目的ということについて、お話しをさせていただきます。そのキーワードとなる言葉は「神の栄光」です。聖書からこの言葉を除いてしまったら、聖書が言わんとすることを伝えることができなくなるかと思うほどに栄光という言葉は聖書において大切な言葉です。

3つのことから神の栄光について考えてみましょう。まず第一に天地万物を通して現れる神の栄光、第二にイエス・キリストを通して現れる神の栄光、そして第三に人間を通して現れる神の栄光です。

天地万物を通して現れる神の栄光

聖書の中の詩篇19篇1節－4節を読んでみましょう「もろもろの天は神の栄光をあらわし、大空はみ手のわざをしめす。この日は言葉をかの日につたえ、この夜は知識をかの夜につげる。話すことなく、語ることなく、その声も聞こえないのに、その響きは全地にあまねく、その言葉は世界のはてにまで及ぶ」。

私がまだ幼子だった頃、私は野山に囲まれた環境に育ちました。物心がつく頃から、山と川を走り回って育ちました。鼻水を垂らし、いつもお腹を空かせ、顔はどこことなく行った先でつけてきた泥や誇りで汚れていました。そういう意味で、最も子供らしい子供だったのかもしれない。

そんな私には大好きな時間がありました。それは、小高い丘に一人、寝転がり空を眺めることでした。青い空をいくつもの雲が流れていきます。その雲を眺めながら、誰その顔に似ているとか、車に見えるとか、そんなことを想像してよく過ごしていました。

そうしている内に眠くなってしまい、起きてみると夕焼け空になっており、カラスがカーカー鳴いていて、「ああ、腹減った」と家に帰っていき

ました。古き良き時代でした。このような自然に囲まれて幼少時代を過ごせたということは、なんと大きな祝福であったと思います。

最近人間が宇宙に行くということも珍しいことではなくなりました。そのメンバーの中には日本人が含まれることもあり、宇宙とはどんな場所なのかということが色々な映像を私達も見ることができるようになりました。地球が私達の生活の舞台ですが、この地球の上空、200マイルから写真や映像ではなくて、実際に自分での目で見ると地球というのはいったいどんなものなのでしょう。それを見た瞬間、私達はどんな思いを持つのでしょうか。

想像するに、まさしく「息をのむ」という表現はその時の私達の状態をあらわすものでありましょう。真っ暗闇の中に浮かんでいる、透き通るような青い地球。まさしく、その球体自体が命の塊であるかのように私達は感じるのではないかと思います。私達はその美しさを表現する言葉を持ち合わせているのでしょうか。

宇宙にまで行かずとも、私達が海に沈む真っ赤な夕日に感動する時、山の静けさや巨大な谷に心が奪われる時、その強い心の思いはどこに向けられるのでしょうか。その時に私たちはその自然物を造られたお方のことを思うのです。

アーティストが作品を製作する時に、それが絵であっても、彫刻であってもデザインとバランスを考えます。自然界も一つ一つを見ますと、確かにそこには絶妙なバランスがあります。さらには相当にハイレベルなセンスがあります。これらは偶然の賜物でしょうか。いいえ、私たちは自然物の中に、それらを造られた神の栄光を見るのです。

詩篇19篇が言っているように自然は私たちに言葉をもって話しかけてきません。しかし、彼らはその存在全てをもって、自分たちを造り、保っている神の栄光をあらわしているのです。詩篇19篇のみ言葉にあるように、全ての天は神の栄光をあらわしており、大空はみ手のわざをしめしています。話すことなく、語ることなく、その声も聞こえないのに、その響きは全地にあまねく、その言葉は世界のはてにまで及ぶのです。幼いころ、気持ち良くて大空の下で眠り込んでしまった私は、その神の栄光の響きに包まれていたのでしょうか。

この辺りまでなら私達は誰しも何かを感じとるのです。なぜなら、そのようなセンサーが私達には予めインプットされているからです。信仰がある

ないにかかわらず、時に私達は日の出を見て「神々しい」と言います。神々しいという言葉は「神々」と書くのです。

不思議な奇しき命の営みを見る時に私たちは「神秘的だ」と言います。ここにも「神」という字が含まれています。多くの人はいくら自然物の背後に何か偉大な存在というものを感じるのです。しかし、それが具体的にどんな存在なのかは分かりません。その具体性はイエス・キリストの中に見出されるのです。

イエス・キリストを通して現れる神の栄光

船で魚釣りに行く人は、最新鋭の機械に驚かされます。すなわち、多くの釣り船には魚群探知機なる機械が備えられています。このあたりに魚はいらるだろうかとか、推測する必要がなくなりました。その画面を見ながら航行して、魚の群れがある海域に来ると、その画面には魚の群れがたくさん映し出されるのです。そして、確かにその船の下には魚の群れがいるのです。

もし、聖書全巻のどこに「栄光」という言葉があるかを調べてみると、あるところにこの「栄光」という言葉が数多く出てきます。まさしく、それは魚群探知機に映し出される魚影のようです。その数は他の聖書箇所と明らかに違います。それまではポツリポツリであったこの栄光という言葉が、その箇所にくると突然、倍増するのです。

どの聖書箇所かご存知でしょうか。それはヨハネ12、13、17章です。この3章の中だけに13回もの「栄光」が出てくるのをご存知でしょうか。この数は聖書の中で際立っています。そして、その多くの栄光という言葉が何を表すために使われているのか皆さん、ご存知でしょうか？

普通、私達が考える栄光とは何か偉大なことを達成した時のことであり、何かに成功した時のことを私達はまず第一に想像します。あのオリンピックの表彰台でメダルをかけられる競技者の姿に私達は栄光を見出すものです。そう考えますと、栄光が多く記されている聖書箇所は、誰かが偉大なことを立て続けにした時なのかと思いますが、実はそうではないのです。

聖書が栄光という言葉は何に最も用いているかといいますと、それは驚くべきことに「イエス・キリストの十字架」なのです。先ほど、申し上げましたヨハネ 12章はイエス様が十字架にかかる一週間前、13章、17章はその数時間前のことであったということがそれを物語っています。

例えばヨハネ12章23-24節を見るとこう書かれています「人の子が栄光を受ける時がきた。よくよくあなたがたに言う。一粒の麦が地に落ちて死ななければ、それはただ一粒のままである。しかし、もし死んだなら、豊かに実を結ぶようになる」

キリスト自身が言われた栄光を受ける時と言うのは、一粒の麦が地に落ちて死ぬ時を意味しました。すなわち、それはイエス様が十字架にかかり、一粒の麦となって死ぬことを意味したのです。

十字架は今日、多くの人達の首や耳につけられるものとなりました。しかし、当時は最も残虐な処刑を意味しました。その十字架につけられた者は、手足を釘で打たれ、多く的人是は激痛と脱水状態に陥り、最後には呼吸困難で死ぬというのが十字架でした。当然、多くのユダヤ人が最も忌み嫌うもの、それが十字架だったのです。

よって、その十字架に「呪い」とか「忌むもの」という言葉が当てはまるのなら分かります。しかし、ヨハネによる福音書はこのイエスの十字架こそが「栄光」なのだとは何度も書きました。そう、聖書の中において、栄光はイエスの十字架において最高潮に達したのです。

なぜなら、その十字架において人間に対する神の愛が最高に表されたからです。欲しい物を与えたりか、願いを叶えるということが神の私達に対する愛ではないのです。人間がその罪のために、罰せられなければならなかった、そのためにキリストが身代わりとなり十字架上で死なれた。そこに神の私達に対する無条件の愛があるのです。ゆえにイエス自ら、その時を「栄光を受ける時がきた」と言われたのです。

お話ししました自然界というものは、どのように成り立っているのでしょうか。言うまでもなくそれは各々の被造物が独立して成り立っているわけではありません。私達が時に神々しく、その神秘に感じ入っている被造物は、自分以外の生き物に命を与えて、その役目を終えていきます。いつまでもあり続けるものではなく、その命と身代わりに、別の命が生きながらえていく、それが神が創造された世界であり、このことゆえに自然界は継続し、保たれているのです。その自然界の中に私達は神の栄光を見るのです。

聖書が言うところ「栄光」と私達が考えている「栄光」とは全く違うものなのです。最後です。それは人間を通して現われる神の栄光ということなのです。

人間を通して現れる神の栄光

人の生きる目的は何なのだろうか。生きる意味は何だろう。これは私達がここ数週間、礼拝メッセージでお話ししていることであり、人間はこのことについて色々なことを考えてまいりました。そして、今も私達はこの答えを求めています。このことに対してしかるべき答えを見出すことができれば、その人生が明らかに変わるという人達がたくさんいます。

ある時、日本の若者が顔をぼかし、音声を変えて、テレビのインタビューに答えていました。「僕はいつ自分で死んでもいいと思っている。でも、ただ一つのこと分かれば、出来るだけ長く生きていてもいいと思う。それは、何のために生きているのかという問いに対する答えです」。

聖書が開かれるとその問いに対する答えが与えられます。私たちの生きる目的は、生きている意味は私たちを通して神の栄光を現すことです。

先ほども言いましたように、私達が「栄光」ということを考える時に、それは華やかなものであり、スポットライトを浴びるような習慣を思い起こします。しかし、聖書のメッセージはそうではなく、私達は各々、自分の置かれている場所で神の栄光を現すのです。そこは私達の普段の生活の場であり、夫婦の間で、友人との間で、家族の間で、そして教会で、私達を通して神の栄光があらわされること、それを私達は求めるのです。

絵を描く芸術家が、写真家が、彫刻家が、音楽家が自分の栄誉とビジネスのためだけにそれらの芸術に力を注ぐのなら、それは空しいものです。その人たちは、その与えられているギフトで、あちこちでひっぱりだこになったり、高い評価を得たり、報酬が与えられることでしょう。しかし、やがてそれだけでは本当の喜びを得ることができないことに気がつくことでしょう。

しかし、それらを通して神の栄光を現すことを知った時、その人はそこにほんとうの喜びと満足を見出すことでしょう。そして、ますますその人に神様は祝福を注がれることでしょう。このことは、あらゆることに当てはまることです。

キリストはヨハネ15章5節で言われました「わたしはブドウの木、あなたがたはその枝である。もし人がわたしにつながっており、またわたしが

その人とつながっておれば、その人は実を豊かに結ぶようになる。わたしから離れては、あなたがたは何一つできないからである」

キリストはご自身をブドウの木、そして私たちはその枝なのだと言われました。そして、私たちにブドウの木なる自分に繋がっていなさいと言われました。キリストに繋がるということは、神の言葉に養われ、それに生きるということです。そして、そうするならば、あなたがたは多くの実を結ぶようになると言われたのです。

たわわに実ったブドウの実を見る人は、その枝をほめることはありません。そのブドウの木がもつ、命の力の素晴らしさをほめたたえるのです。枝はその木に繋がっており、その木の一部だから、その枝にぶどうが実ったのです。枝になったブドウを見て、実際にそれを食べて、そのような実を生み出した木が栄光を受ける。私達は木に連なっていることにより、ただその理由により実を結ぶことができるのです。このことにより、私達は豊かな実を結ぶ木をほめたたえるのです。

私達はイエス・キリストにつながっていれば、私達は豊かな実を結ぶことができます。イエス様は大胆にも言われました。「わたしから離れては、あなたがたは何一つできない」と。「本当かな？」と思われる方がいるかもしれませんが、このことを意識して、日々、このことに向き合っていますと、この言葉がまことであることに気がつかされます。そうです、確かにイエス様につながっていなければ私達は何もできません。そして、そんな私達がイエス様に繋がっていることにより、実をむすぶことができるのなら、それは私達がほめられることではなくて、それは全てイエス様が栄光を受けるべきことなのです。ここに私達の生きる意味と目的があります。

今日、多くの若者が世界を放浪しています。かつては私もその一人でした。今から28年前、私はインドのプリーという小さな漁村にいました。ツアー客が立ち寄るような場所ではない、それこそ一泊1ドルほどの宿にステイしていました。そこに数日いた時、なんと同じ宿に日本人のおじさんも宿泊していることを知ったのです。見たからに日本人なので話しかけますと、誰でも知っているような大きな企業を10日前に辞めて、一人で旅に出ているという働きざかりの50前後の方でした。

深い話しはしませんでした。仕事を辞めて、こんな誰も来ないような所に仕事をやめて来ているその方と話しながら、色々と考えるところがあるんだらうな一とその時、思ったことを今でも覚えています。

そして、今、おじさんと近い年となり思うのです。きっとあの方は学校を出て、就職して、ふと、これからの人生について深く考えてしまったのではないかと。すなわち「この俺の人生は何のためにあるのだ」というような心からわきあがってくる問いかけに真正面から向き合ってしまったのではないかと思うのです。このようなことに考えがおよんでも、そのことを深く考えずに、素通りしてしまえば、その場を立ち去ることができたと思うのですが、彼はその内なる問いをごまかすことができずに、旅に出たのではないかと今、想像しています。

回りの者達は50にもなって、そんなことをするのは愚かだと忠告してくれたかもしれませんが、このおじさんは誰もがその人生で一度や二度は考え、しかしながら見て見ぬふりをしていることを、実際に探求すべく、リスクを承知で、旅に出たのです。

このような思いは若い頃のみならず、齢を重ねていくにあたり、いいえ、その人生の晩年になっても私達の心のどこかに引っかかっていることではないでしょうか。

私達が生きる目的は、我々の命の源なる神の栄光を表して生きていくことなのだと言います。コリント人への第一の手紙は「あなたがたは、代価を払って買い取られたのだ。それだから、自分の体をもって、神の栄光をあらわしなさい」（コリント人への第一の手紙6章20節）と記しています。

そうです、私たちはイエスの十字架によって買い取られたのです。ゆえに、この私達は私達のものではないのです（そもそも、このことに気がつく以前より、すなわち生まれた時から私達は神様のものです）。そして、そうなる私たちの人生の目的は長期的なものではなくなるのです。今日が明日が、今がその目的を成し遂げる時となるのです。

ピリピ書にはこう書かれています『キリストは神のかたちであられたが、神と等しくあることを固守すべき事とは思わず、かえって、おのれをむなしうして僕のかたちをとり、人間の姿になられた。その有様は人と異ならず、おのれを低くして、死に至るまで、しかも十字架の死に至るまで従順であられた。それゆえに、神は彼を高く引き上げ、すべての名にまさる名を彼に賜った。それはイエスの御名によって、天上のもの、地上のもの、地下のものなど、あらゆるものがひざをかがめ、またあらゆる舌が「イエス・キリストは主である」と告白して、栄光を父なる神に帰するためである」（ピリピ2章6節—11節）。

ここにはイエス様の地上での生涯が簡潔に記されています。その生涯は己を空しくするものであり、十字架にいたるまで従順に歩まれた生涯でした。そして、先ほど触れましたように、その十字架は神の栄光が輝く時だったのです。そして、それ故に父なる神はさらにイエス様を高く引き上げられたのです。

私達一人一人のために命を捨てたイエス様を前に、今や天上のもの、地上のもの、地下のもの、すなわちあらゆるものが膝をかがめることになりました。そして、生きるもの全てが「イエスこそが私の主である」と告白して、栄光を父なる神に帰するためなのだというのです。そう、イエス様ですら、栄光を父なる神に帰するために、僕としての生涯を歩まれたのです。まさしく、ここに私達の模範なるお方がいるのです。

私たちにはとてつもなく崇高な使命があります。それは、神の栄光を現すために生きているということです。そうです、こう言いますと遠慮がちな方は「とんでもない、そんなこと私にはできない」と思います。「そもそも、私はそんな立派な者ではない」と私たちはしりごみします。

しかし、神様は私たちに立派さを求めてはいないのです。コリント人への第二の手紙4章6節―7節にこう記されています「闇の中から光が照りいでよと仰せになった神は、キリストの顔に輝く神の栄光の知識を明らかにするために、わたしたちの心を照らして下さったのである。しかし、わたしたちは、この宝を土の器の中に持っている。その測り知れない力は神のものであって、わたしたちから出たものでないことが、あらわれるためである」

ここに記されているように私達はもろく、傷つきやすい土の器なのです。神様はそのことを十分に承知しています。しかし、この叩けば壊れてしまうこの土の器の中に私達はイエス・キリストの輝きを持っているのです。ひび割れしているような弱い土の器、しかしそのひび割れている所から内にある神の光が輝くのだ。

それなら自分にもできそうだな。そう私たちは思わないでしょうか。不思議な言い方になりますが、自分は強いと思っているなら、神の栄光は輝きません。なぜなら、自分は強いという自覚が、神の栄光をさえぎるからです。しかし、私は不完全なものです、主よ、そんな私を通してその栄光を現そうとおっしゃって下さるなら、どうか私を用いてください。そう祈り求めようではありませんか。

2018年7月1日「神の栄光のために」

この器自体は不完全なものです。しかし、その内から溢れている光は一体何なのだ。この器はいったい誰が作ったのだ。陶器師は誰なのだ？。その時です、私達は言うのです、「それは私の内にいますリキリストです」

その時、神の栄光は輝くのです。私達が愛する者達のためにキッチンに立つ時、ギターを抱え、それを奏でる時、同僚たちと何かのプロジェクトに取り組んでいる時、友人達と食卓を囲む時、これら生活の全ての時が神の栄光をあらわす時となるのです。そして、それこそが私達がこの地で今も生かされている理由であり、このことが私達を突き動かす心の動機となりうる唯一のものなのです。お祈りしましょう。